
僕らがまだ、幸せを笑えた頃

りいち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らがまだ、幸せを笑えた頃

【Nコード】

N7491E

【作者名】

りいち

【あらすじ】

高校二年の僕ら6人。喧嘩、イタズラ、好きな娘、僕らを取り巻く全てが輝いていたあの頃。コメディあり、涙ありのちょっとした切ない青春ストーリー。

僕たち

朝の教室は無駄に騒がしい。ただでさえ外からはセミの鳴き声やかましく聞こえてるってのに。最近地球温暖化が進むせいで5月だというのに真夏のように暑苦しい。こんなじゃ本格的な夏が来る前に死ぬんじゃないだろうか、俺。

「おーっす、夢次」

渋谷が声をかけてきた。停学が開けたばかりの渋谷は久々の学校に、若干テンションが上がっているらしくいつもよりもしつこく絡んでくる。なんて迷惑なんだ。

「なあなあ、今日一限サボってアイス食いに行こうぜ」

「停学解けたばっかで何言ってるんだ、お前」

「えゝ暑いじゃん」

何ひとつ学んでないな、コイツ。

渋谷の停学は今回が初めてではなかった。問題児なこいつは一年の時から喧嘩やら煙草やらで何回か停学を食らっていたのだ。

俺や他の奴らも停学になったことくらいはあるが、渋谷ほどじゃ

ない。あと一息で退学、という言葉が一番リアルな男なのだ。

「いいから今日くらい大人しくしろって」

俺の忠告も聞かず、渋谷はまだアイスを連呼しているが、タイミングよく本鈴が鳴った。

立っていたクラスメートもちらほらと自分の席に戻っている。俺も同じく廊下側の自分の席に腰を下ろせば、俺の後ろの席である渋谷も仕方なさそうに席に着いた。

間もなくして担任も教室に入ってくる。今年新しくこの学校にきた美人新米教師のエリコちゃん。

「お、今日は白いスカートだ。パンツ透けねえかなあ……。な、夢次」

「俺に同意を求めるな」

渋谷のエロ発言が聞こえたのか、エリコちゃんはキツとこちらを向いた。あの、何で俺まで睨まれてるんでしょ……。

しかしプラス思考な渋谷くん。バカ面下げて手を振っている。いつも渋谷に手を焼いているエリコちゃんも、今日はどこか強気だ。

「渋谷くん？」

「は〜い」

「そんなことばかり言っているとセクハラで訴えられるわよ」

「じゃあ心の中で言うならいいですか」

「どういう意味？」

「心の中でエリコちゃんとあんなことやこんなこと……」

おいおい渋谷、それかなりアウト……

「分かったからもう何も言わないで……」

またもや渋谷のエロ発言に深い溜め息を吐くエリコちゃん。女子からの白い視線もちろん渋谷には届かない。まあそれはいいけど……俺まで睨まれてるのは何故？

エリコちゃんが出席をとっていると、突然廊下から誰かの走る足音が聞こえた。それは俺たちの教室の前でピタリと止まると、今度は勢い良くドアが開けられた。現れたのは問題児の一人、竹身風童。たけみふうどう

「間に合ったー！」

「……」

いや、全然間に合っていないからね。思いつき遅刻だからね。この教室の気まずい空気読もうか。いろんな意味で完全にアウトだよ、風くん……。

「た、竹身くん」

エリコちゃんもあまりに突然だったので処理に困っている。だがすぐに

「遅刻よ」と厳しく言った。

それを聞いた風くん、すぐさま反発。

「こればあえいやろが、ちっとまけろや」

今まで転校を繰り返してきた風くんは中途半端にいろんな県の方が言が混ざっている。何を言っているか分からない時も多々あるが、どこか迫力があるのは何故だろう。この高校にも一年の中頃に転校してきたのだ。

しばらく言い合うエリコちゃんと風くんだったが、これにはエリコちゃんが勝った。というか風くんが折れた。何だかんだ言っても美人には弱いのだ。仕方なく俺の斜め前の席に着く風くん。

「何で遅刻したんだよ」

「チャリぶっ壊れたんじゃ」

「はあー？また？どんな漕ぎ方してんのお前」

「普通に漕いどるつもりやけどなあ……」

いや、普通に漕いだらぶっ壊れたりしませんけど。

「それより今日一限目サボろうや」

この言葉に反応したのは渋谷。再びアイスを連呼し始める。そんなに食いたいのか、アイス。

しかし風くんの目的は違った。それはアイスよりもずっと魅力的なものだった。

「今日女子、一限目水泳らしいぞ」

「え、」

思わず固まる俺と渋谷。もちろん二つ返事で頷いたのだった。

H R 終了と同時に勢い良く教室を飛び出す3人。一限目男子は運動場でサッカーだが、俺たちが向かったのはもちろん男子更衣室な

んかじゃない。サッカーは好きだが、女子のプールには勝てないのだ。

「いいのかよ渋谷、お前曲がりなりにもサッカー部だろ」

「あー、全然。問題なし！」

まあいいか……本人が言うんだから。

向かったのは二階の空き教室。プールに一番近く一望できる上に誰も使わないこの教室は、普段から俺たちの溜まり場になっている。渋谷を筆頭に教室のドアを開けた。ガランとした空き教室はすぐに俺たちの声で埋め尽くされる。

窓を開けると生温い風が髪を撫でた。

俺たちは窓際の机に横一列に並んで座る。

「まだ女子来てねーじゃん」

「着替え中やろ」

「……」

すると黙り込む渋谷。何かいけない妄想をしているらしい。口を開いたかと思うと

「……覗いてみてえな」

見事な変態発言。お巡りさん、未来の犯罪者がここにいますよ。まあ、今してることもあんまり大差ないけど……。

「今頃日焼け止めの塗り合いっこかしてるんだろぅなぁ〜《やーだー。どこ触ってんのよー》とか言って」

一人妄想を繰り返す渋谷を完全無視し、女子の登場を今か今かと待っている時、突然教室のドアが開く音がした。誰か見回りの先生かと思いきや驚いて振り向く。しかしそこには先生じゃなく、よく見る顔ぶれ二人が立っていた。

「なんだ、お前らも来てたのか」

そう言って笑ったのは隣のクラスの伊武。コイツも渋谷と匹敵するくらいバカで、8割方妄想で生きてるような変態だ。この教室にきたのは言うまでもなく俺たちと同じ理由だろう。

「俺は伊武くんは無理矢理連れて来られただけだね」

伊武の後ろにいる望月が携帯を打ちながらめんどくさそうに呟く。この望月がまた誰かが認めるモテ男で、クォーターという利点も

あつてか、ムカつくくらい美形だ。生まれつき栗色のその髪の毛は誰の視線も惹きつける。

「あ？江奈は一緒じゃないのか」

「誘ったんだけどよお……あいつホラ、変に真面目だろ？彼女いるし」

「あー、まああいつ女に不自由してないしな」

「それなら望月も不自由しとらんやろうが。伊武はともかく」

「おい、俺はともかくってなんだよ」

「いや、そのまんまの意味やけど」

ストレートに言い過ぎだ、風くん。

「おい、女子来たぞ」

窓に張り付いていた渋谷が大声を出す。確かに外からは女子のものと思われる甲高い声が響いていた。

すぐさま全員が窓に張り付き目を見開く。スクール水着をきた女子たちがタオルで隠すこともせずに堂々と準備運動に励んでいた。

「まさに絶景ですなあ」

しみじみと言った渋谷の言葉にみんなが頷く。ただ一人モテ男の望月だけはとりとめ興味無さそうにただ見下ろしているだけだった。こういう所が俺たちとは違う。すると突然、その端正な顔立ちからは想像もできないほど苦い一言を放った。

「ほんと女ってうるさいな。醜いただのメス豚のくせによ」

「……そのセリフ録音して校内放送で流していいか？」

「やめとけ夢次、全学年女子の恋が半分近く終わるぞ」

「違いねえ……」

恐るべし、望月。

すると俺の隣に立っていた伊武がもぞもぞしている。まさかとは思いついてみると、予想通り股間を押さえて前かがみになっていた。……まじかよ。

あえて何も言わず気づかないふりをしていると、馬鹿な渋谷がそれに反応する。

「伊武う！お前なに股間押さえてんだよ」

「うるせえ！ちょっと黙れ！」

渋谷のせいで全員の視線が伊武の下半身へと集中する。可哀想に……指まで差されて。一番見つかつてはいけない奴に見つかってしまった伊武くん。若干キレ気味で渋谷くんを睨んだ。だけど股間を押さえたままの姿勢じゃイマイチ迫力が出ない。

渋谷調子に乗って豪快に笑い始める。それにつられて俺たち全員も大爆笑。ツボに入ってしまったようで、みんな笑いが止まらない。まさか起きちゃうとはな……。

「お前ら笑いすぎだろ！」

「だいぶ溜まってんのなあ！伊武！」

窓を開けっ放しだということも忘れ大声でからかう俺たち。当然すぐ下の女子たちが気づかないはずもなく、すぐに俺たちの方を指さされた。心なしか《変態》という単語があちこちから聞こえるのは気のせいだろうか。

とにかくやばいやばいと焦る俺たち。今更遅いがどうにかしなくてはいいけない。

「お前のせいじゃ！伊武」

「何でだよ！最初に騒いだのは渋谷だろ」

「馬鹿か！もとはと言えば伊武のチンコが……」

「バカはお前だ渋谷！それ以上言うな」

「仕方ねえだろ、俺だってまさか水着だけでデカくなるなんて思っ
てなかったし」

「伊武も余計なこと言うなって！」

この変態バカコンビのせいでますます状況が悪化している。もう
女子たちには丸聞こえ。話の真相を知った彼女たちは益々警戒し、
ベンチに重ねてあったタオルを慌ててとりに行った。

望月といえなささと窓から離れ女子たちからは見えない位置に
移動し、涼しい顔してこの状況を観察している。ムカついたがとり
あえず俺たちもカーテンを閉め窓から離れた。

「うわー、完全アウトだろ」

「伊武のせいだぞ」

覗いていたのは全員なのだが、みんな責任転化はお手のもの。口
々に伊武に八つ当たりしていると、今度は息を切らした体育教師の
坂田が突然教室に入り込んできた。驚いた俺たちは思わず固まる。
何せ水泳授業の途中だったので、彼は海パン一枚だったのだ。つー
か、プールくせえ。

「お前ら！今女子のプール覗いてただろ！」

濡れた髪をかきあげながら坂田が怒鳴り散らす。俺たちがとぼけた顔して、さあと首を捻ればその声はもっと大きくなった。

「大体今授業中だろ！何やってんだ！」

何って……覗きですけど。

すると渋谷。開き直ったのか口を尖らせ反抗する。

「いいよなあー先生は女子の水着堂々と見れてよー」

「ほんとほんと。ズルいよなあ」

「じゃけど伊武と違ってすぐ起たんしな」

「殺すぞ、風くん」

呆れたように坂田はため息をついた。うん、これはもうため息くらいしか出ないだろうな。

「望月、お前もか」

黙っていた望月に坂田が尋ねる。

裏切ったら殺すぞオーラを全員で放ちながら望月を見れば、それを感じとったのか少し遅れて

「そうだけど」と返事をした。その言い方はまるで

「そうだけど文句あるか」とでも言いたげな、何とも言えない上から目線でとてもじゃないが覗きをした奴のセリフとは思えない。やはり恐るべし、望月。

「……全員あとで生徒指導室に来い」

その言葉に俺たちは大ブーイング。生徒指導室なんて行っていないことなんてひとつもないのだ。

坂田は心底呆れたように溜め息をつく俺たち一人一人をじろりと見渡した。

そういえば海パン一丁の男と男子学生5人。どう見ても爽やかな図ではないような気がする。

「先生、そろそろ着替えたらどうっすか」

「え？あ、ああそうだな。とりあえずお前ら、今すぐ生徒指導室な」

「えー、今すぐかよ。あとでって言ったのに」

「口答えするな渋谷。どうせお前が主犯だろ」

「間違い！」

というか健全な高校生に向かって主犯って……。犯罪者かよ、俺たち。いや、近いものはあるんだろうけど。覗きだからなあ……。

「覗き、ねえ……」

生徒指導室のソファにどっかりと腰を下ろし、床に正座させられた俺たちを見下ろしているのは鬼の生徒指導、前田。柔道部の顧問でもあるコイツは相手が女子だろうと規律を乱す奴は構わず怒鳴り散らす。相手が男子なら尚更。故に嫌われ者だ。

前田は口に禁煙用のパイプを加えたまま、低い声で問いただした。

「で、誰が一番最初に誘ったんだ」

俺は固く口を閉ざした。誘ってきたのは風くんだった。だけど簡単に口を割るほど俺たちの友情は薄いものじゃない。これぞ美しい友達愛。

しかしその想いは次の瞬間、みんなの言葉により一気に崩れ落ちた。

「夢次です」

「ああ、間違いない」

「確か夢次やな」

「一度は止めたんですけど夢次くんがどうしてもって……」

「え……俺？」

いやいやおかしいだろ。一回も止められた覚えねえし。つかみんな自分の意志だろ。しかも伊武と望月が来たことに関しては全く俺ノータッチだよな。完全別行動だったよな。それがなんで全部俺の責任？

「ほう、夢次……お前か」

「違いますって！お前ら何嘘ついてんだよ！」

「いや、もう認めましょうよ夢次さん」

「だからあの時止めときましようって言ったのに……夢次さんてば」

「そうっすよ夢次さん」

「いや、むしろリーダー」

え、なに……コイツら完璧に口裏合わせてるよ。死ねばいいのに、もういっそ全員死ねばいいのに。しかも、え？どうしたのその白々しい敬語。何で俺との間に若干距離生まれてんの？何で俺が無理や

りお前ら付き合わせたみたいない方すんの？何か俺だけ変態みたいじゃん。往生際の悪い変態バカみたいじゃん。

「往生際が悪いぞ、夢次」

うわー、往生際が悪いって前田言っちゃったよ。俺がさっき心の中で呟いた言葉、こいつが改めて言っちゃったよ。もうダメじゃん俺。明日から確実変態グループのリーダーじゃん。

ニヤリと薄く笑う四人の隣で、俺が軽く今後の学園生活に絶望している跟前田が口を開いた。

「夢次、」

「……はい」

「女子全員の前で土下座するのと、校内全てのトイレ掃除。どっちがいい」

「トイレ掃除をお願いします」

もちろん俺は即答した。

ゴム手袋、ホウキ、ちりとり……。有り難くも前田から配当された掃除道具を各々持ち、放課後の男子トイレを磨く俺たち。

時々、何も知らず用を足そうと入ってくる他の男子生徒を容赦なく追い出しながら迷惑な掃除は続いた。何せ全校舎のトイレ。ちんたらやっていたら明日になってしまうのだ。

ついに残りひとつとなった時、予想通り渋谷の集中力が切れた。

「疲れたー。もういいんじゃないね」

そう言いながらホウキを床に投げ捨てる。渋谷のその一言にみんなの集中力も失せてしまったのか、次々にホウキを投げ捨ててしやがみこんだ。

「つーか夢次だけじゃなくて結局俺たちも掃除すんのな」

「あったり前だろ。だいたい俺だけに責任押し付けやがって、お前ら」

「いや、あの状況やったら仕方なかったじゃろ」

「そうだよ夢次くん。そのうちいいことあるって」

「そうそう、明日には彼女できるって」

「一億円当たるって」

コイツら適当なことばかり言いやがって……。

「腹減ったあ。もう外暗いぜ」

「そうじゃな、もうええやろ。帰ろうや」

完全に帰宅モードの伊武と風くん。渋谷もニコチン切れのせいかさつきから元気がない。望月は欠伸をしながら携帯片手にメールを打っていた。最早みんな、ホウキを持つ気配すらない。

こうなればもう全てがどうでも良くなる。明日も朝から学校だから、という適当な理由をつけさっさと帰ることにした。

だらだらとトイレを出る。廊下に置いてあった荷物を拾って靴箱へ行けば、すぐに伊武が何か異変に気がついた。

「なんだ、これ……」

靴箱に何か入っていたのか、不思議そうに呟く渋谷。ラブレターか？とからかい混じりに言えば今度は渋谷が反応する。モテない男の代名詞である渋谷、伊武コンビ。渋谷としては自分と同じ境遇である伊武にラブレターなどという代物があつてはいけないのだ。

しかし伊武は

「ちげえよ」と言って全員にそれを見せた。

「何だ……？」

伊武が持っているのは一枚の紙。その紙には、よくドラマなんかの殺人予告で使われるような新聞の切り文字が並べられていた。

《呪いをかけました》

「うわ、気持ち悪いな」

「なんじゃこれ、最近のラブレターは随分変わっとなるな」

「いや、風くんそれ絶対違う……」

果てしなくポジティブな風くんは置いて、みんなじつとその紙を見る。不気味なくらい静まり返った夜の校舎のせいかな、その文字は何倍も気味悪く見えた。俺はふいに辺りを見渡したが、俺たち以外は誰もいない。

しかし普段から物事を深く考えない伊武は、くだらねえと言いつの紙を丸めて投げ捨てた。

「放つとけ。どうせただのイタズラだろ」

そう言うとかかとの潰れた靴を履き、帰ろうぜと笑った。その様

子がいつもの伊武であることに俺は少し安心する。みんなもそうだったのか、伊武の意見に同意して靴を履きかえた。
しかし何であんな気持ち悪いイタズラ……。

「伊武、何か心当たりないのかよ」

「うーん……」

「ないかあ……」

「いや、ありすぎてどれか分かんねえ」

確かに。渋谷と1、2を争うくらい喧嘩の強い伊武はところ構わず喧嘩を売るくせがある。そして渋谷とは違い、勝つためには手段を選ばない。その為卑劣な手を使うこともしばしば……。そこら中で恨みを買うなんてのは有り得ない話じゃない。
するとそれまで黙っていた望月がいつもの落ち着いた様子で言った。

「大丈夫だよ、伊武くん。何かあったら俺も参戦するからさ」

続いて風くんも。

「おう、とっつかまえてボコボコにしてやろうや」

実は望月も風くんもなかなかの腕で、喧嘩の時は必ず参加する。

風くんは中学の時野球で鍛えた筋肉があるし、望月も一見華奢な身体をしているように見えるが実は結構鍛えてたりする。何せ実家が空手道場だと言うから驚きだ。

強さの順から言えば渋谷、伊武、望月、風くん。後ろの二人はどんぐりの背比べで、ほぼ同じ力量。この4人が揃えばまず怖いものはない。

俺はと言うと、喧嘩はするがあまり自信がある方じゃない。今日はいないがもう一人、俺たちの仲間で江奈という奴がいる。江奈も俺と同様、喧嘩はあまり得意じゃないのだ。

自転車置き場へ行くと、残っているのは俺たち5人の自転車のみだった。

「くそ、前田のせいでこんな時間になっちまった」

「まあ、女子全員の前で土下座するよりマシだろ」

「違いねえ」

朝、自転車の壊れたらしい風くんは伊武のBMのステップに飛び乗った。

一斉にペダルに力を入れ、校門を抜ける。人通りの減った夜の並木道を、道いっぱい広がった俺たち5人がノロノロと進む。早く帰ろうと言う割りには急いでペダルを漕ぐ奴はいない。結局みんな、こうやって一緒に過ごす今の時間がいつまでも続けばいいと思って

いるのだ。

嵐の前

「やっぱ一番は愛ちゃんだな。なあ夢次、そう思わねえ？おい無視すんなって、なあ」

朝っぱらから教室の前でAV女優の話を何の恥じらいもなく堂々としているのはバカの代名詞、渋谷壮介。その図太い神経に乾杯です。

一人喋り続ける渋谷を無視しながら教室に入る。各教室に2台しかない扇風機は既に女子共に占領されていた。

自分の席へ行こうとすれば、クラスメートの小夜が俺の机に腰かけ違う女友達と話をしていた。こちらへ気付く様子はない。

「いいなあ、お前の机。小夜ちゃんのお尻触ってるぜ」

「渋谷、お前いろいろ間違ってるぞ」

「どうせなら俺の机に座ってくれば良かったのになあ」

「俺が女子なら死んでもお前の机に座りたくない」

そう言い捨て、俺は小夜の元へ歩みよった。文句なんて言うつもりは到底なく、ただカバンだけ置きたいと思ったのだ。

しかし俺に気付いた小夜はすぐさま机から飛び降りた。

「夢次くん、ごめんね」

「あー、いいよ別に。座ってて」

そう言ったのに彼女は座ろうとしなかった。ただ俺の方を申し訳なさそうにじっと見ている。机如きでそんな顔しなくていいのに、と内心思いつつ椅子にカバンを置いた。俺が机から離れようとする、すぐに名前を呼ばれる。

「夢次くん。あの……」

「え？」

「あの……おはよう！」

「え？ ああ、うん。おはよう」

小夜は肩まで伸びた黒い髪を耳にかけ、首を傾げて笑った。あ、やばい。ちょっと可愛いかも。

フラフラとその場を離れ、窓際へ行く。そこには渋谷もいた。

小夜のことは別に好きでもないし、気になっていたわけでもないが、昨日プールを覗いたばかりだと言うのに挨拶してくれた事実が俺のテンションを上げてくれた。普段あまり話さない子なら尚更だ。男とは単純な生き物なんだと改めて思い知らされる。

「よっ、覗き野郎共」

上がったばかりの俺のテンションがその一言で一気に下がった。睨みながら渋谷と同時に振り向くと、伊武や望月と同じクラスである江奈がニヤニヤと嫌な笑いを浮かべていた。

「お前ら昨日覗きバレたんだってなあ」

「うるせえ。違うクラスは入ってくんな」

「そうだ。つーか何でお前だけ来なかったんだよ。ノリ悪いなボケ」

俺と渋谷が口々に責めるが、江奈は焦る様子もなくまだ笑っていた。

「俺がもしプール覗いて彩乃にバレたら殺されるだろうが」

彩乃ちゃん、とは江奈の彼女だ。一年の時から付き合いで、かなり可愛い。だがその反面嫉妬深くすぐキレる上にかなり凶暴。だがかと言って江奈が優しく穏やかに彩乃ちゃんをなだめるというわけでもなく、いつも何かと喧嘩の絶えない2人なのだ。結局顔に爪跡を残し、江奈が降参するのだけど。

「なんだよ江奈、そんなこと言いに来たのか」

「いや、」

それまで笑っていた江奈の表現が真剣になった。ポケットから紙を一枚取り出し俺たちに見せる。それは昨日伊武の靴箱に入っていた、あの手紙だった。

「ああ、これね。伊武から聞いたのか」

「まあな……」

「あ？でも確かそれ昨日伊武が捨てたはずじゃ……」

渋谷、珍しく鋭い指摘。そうだ。確かにあの時伊武は丸めて床に投げ捨てた。だけど江奈の持っているこの手紙はシワひとつなかった。ということは……。

「今朝、俺の靴箱にも入ってた」

「本当かよ……」

どういうことだ。伊武はともかく、とても恨みを買うような奴じゃない江奈まで。途端に嫌な胸騒ぎがした。

「伊武や望月はなんて？」

「伊武はただのイタズラだから放っておけてよ。あんまり気にしてないみたいだった。望月はまだ来てねえな」

江奈は眉間に皺を寄せて頭を掻く。困った時のこいつの癖だ。

何か害が起きたわけではないのでとりあえず俺も伊武と同じように、気にするなよと江奈の肩を叩いた。すると突然……

「あー、こんな所にいた！」

教室中に甲高い声が響き渡る。教室のドアの所に彩乃ちゃんが立っていた。江奈を探していたのか、ふくれっ面でこちらを睨んでいた。

げっ、と思わず呟いた江奈の声は幸い彩乃ちゃんには聞こえていないようだ。

彩乃ちゃんはズンズンと教室の真ん中を通ってきた。あんな大声を出したのだ。周りの視線は勿論彩乃ちゃんに集中するが、彼女はそんなこと微塵も気にせずいつも通り堂々としていた。

長い髪をなびかせ、俺たちのそばにくる。

「探したんだよう、江奈くん」

「彩乃……」

「ちょっとあんたら！」

いきなり俺と渋谷を《あんた》呼ばわり。さすがの渋谷もあまりの迫力にたじろいだ。というか渋谷は元々彩乃ちゃんのような気の強い女が苦手なのだ。

「江奈くんとらないですよ！」

そう言って江奈の腕をがっしり掴む彩乃ちゃん。

いや、ここ俺たちのクラスだよ。明らかに来たのは江奈の方であって俺たちがとったわけでは……。

俺たちの心の声も彩乃ちゃんには届かず、途端にイチヤつきだす2人。思わず顔を見合わせる俺と渋谷。

「今日はお弁当作ってきたんだ」

「え、まじ？ ウィンナー入ってる？」

「あったりまえじゃん。江奈くんの大好物だもんね」

「でも彩乃が作ったやつはなあ……」

「ひどいなあ、今日は上手に作れたんだから！」

あーはいはい、良かったね仲良しで。容赦ないバカップル。いろんな意味でギリギリだ。喧嘩の時は第二次世界大戦並みに荒れるくせに。

すると黙っていた渋谷、口を開いたかと思うと……

「なあなあ夢次」

「んあ？」

「こいつらそろそろ殺っていい？」

「そんな素晴らしい笑顔で言われても……」

笑顔の奥の黒い部分が丸見えですよ、渋谷くん。

「じゃ、またあとでな」

さっきの真剣な表情はどこへ行ったのか、江奈はいつものヘラヘラ笑いで彩乃ちゃんと教室を出て行った。一体何しに来たんだ、あいつ。ただ見せつけたかったのか？嫌みか？嫌みなのか？

「くそ、暑苦しい奴らめ」

「地球温暖化が悪化してんのは確実にあいつらのせいだな」

「違いねえ」

昼休み、俺たちはいつものように溜まり場である二階の空き教室に集まる。そう、プールの覗きがバレたあの教室だ。昼休みだけはみんな自然とここへ集まってくるのだ。俺、渋谷、風くんの三人が教室に着いた時もう既に伊武達はいた。ただ約一名来ていないが。

「江奈は彩乃ちゃんだったよ」

「知ってる」

朝あんだけいちやつかれたんだ。どうせまた二人で仲良く食べてるんだろう。すると机に堂々と脚をのせた望月が怪訝そうに言った。

「何で江奈くん、あんな馬鹿女と付き合ってるんだろう」

「望月って彩乃ちゃんのことほんと毛嫌いしてるよな」

伊武が言うと、望月は当然のように頷いた。
というか望月は彩乃ちゃんに限らず学校内のあらゆる女を嫌って

いる。別にゲイなどではない健全な男子高校生なのだが、要は見る目が厳しいのだ。今まで望月の口から恋愛の話なんて聞いたことがない。そこが女から見て彼のいいところであり、魅力なんだと江奈が語っていた。俺も、そう思う。

すると突然、校内放送がかかった。その声は毎日嫌という程聞いているエリコちゃんのもの。

「二年四組の竹身風童くん。今すぐ職員室に来なさい」

風くんは面倒くさそうに頭をかいて食べかけのパンを机に置いた。

「おいおい、何やらかしたんだよ」

「んー、多分遅刻のことじゃと思う」

「お前、今学期になってほぼ毎日だもんな。そりゃ呼び出しも食らうわ」

そう言う風くんは軽く溜め息を吐きながらだらだらとドアの方へ歩いて行った。畜生暑いな、なんて文句を言ったあと、思い出したようにこちらを振り向く。

「俺のパン食べた奴、絶交やぞ」

「誰が食うか、こんな汚ねーパン」

「言うたな渋谷。絶対食うなよ、絶対やからな」

「分かったから早く行けよ、うぜえ」

もちろん渋谷くん、風くんがいなくなったと同時にパンに手をつきました。

「渋谷、お前ってほんと自由な」

「ん？そうか」

「自覚ない所が余計タチ悪いな」

「ああ、最悪だな」

「渋谷くんは根本から叩き直さないと無理だね」

「はあ？何のことだよお前ら。意味分かんねー」

「ああもう喋んなくていいから、無理すんな」

「んだとコラ、伊武」

「ああ？」

伊武と渋谷の小競り合いが終わった時、望月がポツリと呟いた。

「そういえばさあ……」

「何だよ」

「伊武さんと江奈くんにきたあの手紙って、誰だろうね」

一瞬しんとなる。みんな何だかんだで実は気になっていたのだ。
あんな気味の悪い手紙を見て気にしない奴なんかいない。もらった
本人である伊武や江奈なら尚更。

だけど変に強がりの伊武は、

「お前らびびってんのかよ」と、おどけて笑ってみせた。すると単
純な渋谷は慌てて弁解する。

「バカお前、俺がびびるわけねーだろ。だいたい手紙きたのはお前
と江奈なんだしよお」

「いや、素行の悪い伊武くんはともかく人脈のある江奈くんにまで
手紙が来たのはやっぱりおかしいよ」

「ああ？望月お前素行悪いって何だよ失礼な」

「だって伊武くん中学の時からグレてたじゃん」

「グレてねえよ」

「ふーん。入学したてで上級生ぶん殴って土下座させてたの誰だっけ」

「お、お前だって一緒にいただろ！」

「俺は見てただけだよ」

「うわ堂々と嘘ついたよコイツ、ありえねー。お前だって土下座した奴の顔靴で踏んづけてグリグリしてたじゃん」

どんなプレイだ……それ。

「いやいや、殆ど伊武くんだって。8割くらいは」

「じゃあ残りの2割結局お前だろ。認めてんじゃねーか」

「あ。伊武くん計算できるようになったんだ、良かったね、安心したよ」

いつものごとく、甘いフェイスで毒を吐く望月。伊武は額に青筋を立てていた。この2人は小学校からの幼なじみらしく、何だかんだで仲が良いのだ。

若干話はそれだが、その通りだった。やっぱりおかしい。よくイタズラや喧嘩をする俺たちだけど、江奈と伊武が手を組んで何かを

するということは一度もなかった。

「江奈と渋谷間違えて入れたんじゃねーの」

「おう、それなら納得できるわ。渋谷と伊武やったら嫌われツイートップやもんな、特に渋谷」

「うわー、パン食べたのまだ根に持ってるのか風くん。ネチネチしつけーな、腹筋割れてるくせによ」

「当たり前じゃボケ、食べ物への恨みは恐ろしいって言葉知らんのか。つーか腹筋関係ないわ」

何でこいつらといると話がなかなか進まないんだろう。こんな時に江奈がいればうまくまとめてくれるんだけどな……。

とにかく話を戻す為、一旦静かにさせたあと俺は改めて口を開いた。

「俺の予想だと、嫌がらせはまだ続くと思う」

「夢次ちゃん、考えすぎだつて」

「お前らが考え無さ過ぎなんだよ」

ため息混じりに言うと、望月が味方してくれた。やはり常日頃から冷静な男は違うな、なんて少し感心する。

「とにかく、何かあってからじゃ遅いんだ」

そう、何かあってからでは遅い。だけどこの時もう既に事が起こっているのを俺たちは気付いていなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7491e/>

僕らがまだ、幸せを笑えた頃

2010年10月9日02時59分発行